

英語の不変化詞に見られる意味の階層性

—メタファーの観点より—

石井 康毅

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

1. メタファーの視点に基づく英語不変化詞の意味区分

1.1. 「メタファー」

最初に、本稿で議論の土台となる「メタファー」(metaphor)について必要最低限の事項を確認する。本稿では、メタファーを次のように定義する。

メタファー: 基本的・本質的・字義通りの意味が属するドメインとは異なるドメインに属する事物を本来的に指すが、言語共同体で共有される百科的知識¹・文脈的知識・個人の経験的知識を参照して発話・解釈がなされる言語表現。

「メタファー」は個々の具体的な表現を指すのみでなく、そのような表現の発話・解釈の基礎となる思考パターンも指す。

Lakoff and Johnson (1980)以前は、メタファーは特別な修辞表現だと考えられていた。そして現在でも一般的にはそう考えられることが多い。しかし彼らは、メタファーはそれと認識されずとも非常に頻繁に用いられ、実は表層的な言語のみならず思考や行動にも幅広く見られるものであるということを明らかにした。

彼らが唱えた理論の中でも重要なものが、概念間の対応関係を述べた「概念メタファー」(conceptual metaphor)である。CONTAINER, UP-DOWN などのいくつかの基本的な空間概念(「イメージ・スキーマ」(image schema))が現実世界の事物やその構造と組み合わせ、PERSONAL RELATIONSHIPS ARE CONTAINERS (She is *trapped in a marriage* she can't get out of. など)², MORE IS UP; LESS IS DOWN (The crime rate keeps *rising*., The stock has *fallen again*. など)などの複合的な概念メタファーが生じる(Lakoff 1987: 271-283)。このため、メタファーの概念構造には内的な体系がある。さらに、メタファーには連続的な勾配を成す度合い(メタファー度、比喩性)が見られる。Goatly (1997: 38-40)は、メタファーの度合いは、(1)主題(topic)と媒体(vehicle)間の意味的な距離(Approximative Similarity—Distant Similarity/Analogy)³, (2)メタファーの語彙的意味への慣習化の度合い(Conventionality—Unconventionality)⁴, (3)“like”などの標示の有無(Marking—No Marking), (4)矛盾の有無

¹ 以下で述べる概念メタファーはこれに該当する。

² “Personal relationships are also understood in terms of containers: one can be *trapped in a marriage* and get out of it.” (Lakoff 1987: 272)とあることから、筆者が便宜上概念メタファーとして呼称を付し、例も原文を基に作った。

³ 例えば、*Thatcher was Reagan's lapdog.* と *Life is a box of chocolates.* では、前者は同じ動物の範疇に属する人間と犬を比較対照しているのに対し、後者は抽象物と具体的な無生物の人工物を比較対照しているので、後者のほうが主題と媒体間の意味的な距離が大きい(Goatly 1997: 39)。

⁴ 例えば、“cold”には「冷淡な」という比喩的な意味が語彙的な意味として慣習化されている(*Ibid.*: 40)。

(Non-contradictoriness—Contradictoriness)⁵, (5)明示性(Explicitness—Inexplicitness)⁶という相互に関係はあるけれどもそれぞれが独立した5つの連続的推移によって決まると指摘している。本稿で考察する不変化詞のメタファーには、上記の5つの基準のうち、特に(1)主題と媒体間の意味的な距離と(2)メタファーの語彙的意味への慣習化の度合いが関係する。

このメタファーを発話の参加者がどう理解しているのかということに関して、心理言語学の分野では多くの研究がなされている。Blasko and Connine (1993: 295-297)によれば、大きく分けて2つのアプローチがある。1つ目は「直接処理モデル」(direct processing models)と呼ばれるもので、これは比喩的な意味が構築される際には字義通りの意味にアクセスするが、字義通りの解釈を完全に計算してから棄却するわけではないとする立場である。先にメタファーはそれと認識されずに使われることが多いと書いたが、これは処理モデルの観点から言えば、この直接処理の方法で扱われるためにメタファーとは認識されないとと言えるのかもしれない。2つ目のアプローチは「間接処理モデル」(indirect processing models)と呼ばれるもので、これは字義通りの解釈が失敗した場合に初めてメタファーの解釈を探るとする立場である。そのため、このアプローチではメタファーの解釈は字義通りの意味の解釈よりも時間がかかるということになる。これら2つのアプローチのうちのどちらが正しいかは未解決である。間接処理モデルが想定するような時間の差はないと主張し、直接処理モデルのみで説明可能と考える立場もある一方で、文脈の条件などによって比喩的な方が解釈にかかる時間が長い場合も確かにあり、両方のストラテジーが使われているとする立場もある。おそらく通常は直接処理され、高度に比喩的なメタファーは間接処理されるのではないかと考えられている。本稿では、語の比喩的な意味を新たに習得する場合や高度に比喩的なメタファーを処理する場合には間接処理モデルが主張する処理が行われ、一度習得してしまった比喩的な表現に関しては、直接処理モデルが主張する方法で処理が行われると考える。

1.2. メタファーという観点からの不変化詞の意味の区分

本稿で議論の対象とする英語の空間に関するメタファーは、以下の例に見られるように不変化詞を伴う表現(動詞+前置詞句/副詞, 前置詞+名詞句)で表現されることが多く、さらにほとんどの場合1つ以上の概念メタファーが背後にある。

(1) 概念メタファー: AN ARGUMENT IS A CONTAINER

- a. That argument *has holes in it*.
- b. You won't *find* that idea *in* his argument.
- c. That conclusion *falls out of* my argument.

(Lakoff and Johnson 1980: 92)

(2) 概念メタファー: HAPPY IS UP; SAD IS DOWN

⁵ 例えば, *The child is father of the man.* という文は文字通りには矛盾している(*Ibid.*)。

⁶ 例えば, 単に *Vancouver is a cold city.* というだけでは, 文脈がないので“cold”が「寒い」という意味なのか「冷淡な」という意味なのかが不明で, 明示性が低い(*Ibid.*)。

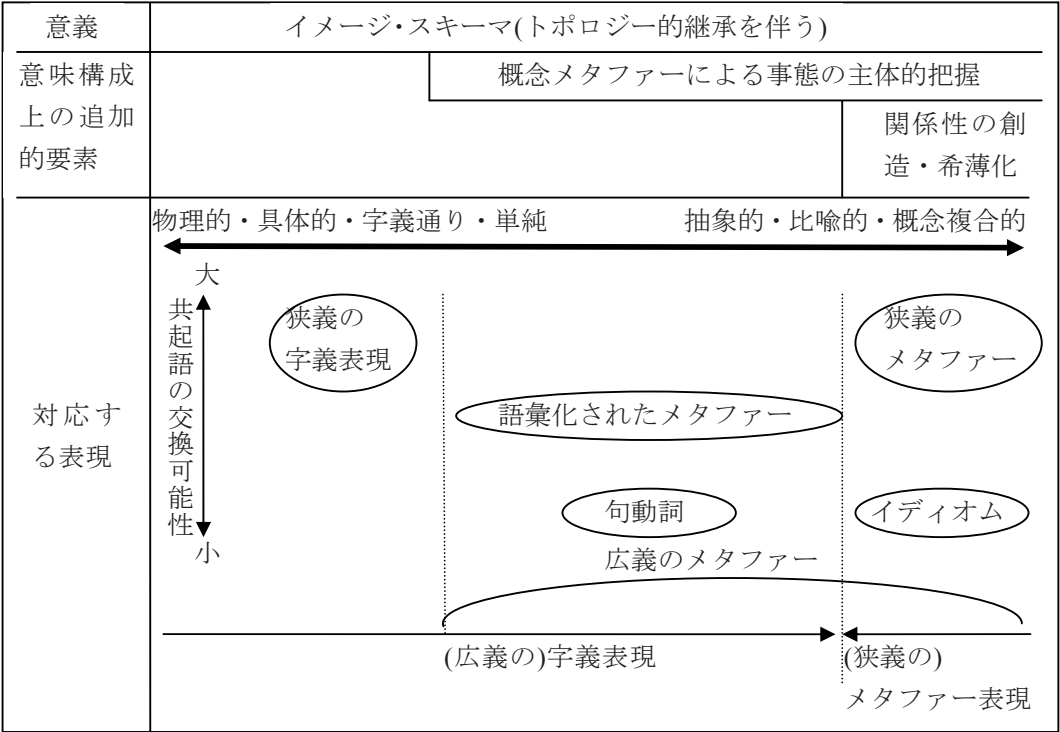
- a. I'm feeling *up*.
- b. I'm feeling *down*.
- c. I *fell* into a depression.

(Ibid.: 15)

なお、空間の意味を持つ前置詞とそれと同形の副詞(*turn over*, *give up* 等)を合わせて、本稿では「不変化詞」と呼ぶ。

筆者は、このような通常は比喻とは意識されないが、概念メタファーを背景として発話・理解される不変化詞の意味を、「語彙の意味として内在化されたメタファー」(以降「語彙化されたメタファー」)と呼び、不変化詞の意味の構造を図 1 のモデルにまとめた(石井 2005)。

図 1: 不変化詞の意味の構造



この区分に関する詳細な議論については石井(2005)を参照されたいが、本稿での主張に関連する部分を中心に、簡単にこのモデルについて概略を説明する。意義としてのイメージ・スキーマについては、2 節で詳細に論じるが、一言で言うと、話者の経験から抽出された空間のイメージが、不変化詞の意味の各レベルに共通する概念的な意義の中核を構成しているということである。そして、このイメージ・スキーマの知識だけで発話・理解が可能な表現が狭義の字義表現である。このイメージ・スキーマに加えて、言語共同体内で共有される概念メタファーの理解が必要なのが語彙化されたメタファーである。語彙化されたメタファーは、通常は比喩的だとはみなされないという点で字義通りの意味としての

性質を持っている。そのため、語彙化されたメタファーはいわゆる典型的なメタファー(「狭義のメタファー」と呼ぶ)ではなく、広い意味での字義通りの意味と考えることが妥当だと考えられる。しかし同時に、概念メタファーに依拠した表現であるという点で比喩的な意味としての性質も持っている(「広義のメタファー」に含まれる)。句動詞はこの語彙化されたメタファーの区分に含まれると考えられる。一方、狭義のメタファーは、メタファーが本質的に内包する異なるドメイン間の関係性を、話者が新たに創造している言語表現である。逆に一部のイディオムでは概念メタファーが希薄化している。

具体的には、(3)~(5)のような表現が、上記各分類に該当する。

(3) The card is *in* the envelope. 「カードは封筒の中に入っている。」(狭義の字義表現)

(4) She is *in* white today. 「彼女は今日は白い服を着ている。」(語彙化されたメタファー)

(5) God is *in* the details. 「神は細部に宿る。」(狭義のメタファー)

Talmy (2000: 25-31, 220-225)は、空間不変変化詞はイメージ・スキーマを表しているのであって、個々の事例における(イメージ・スキーマに反しない範囲での)形状や大きさやその他の細部の差は問題にしないというトポロジー⁷的な性質(topological character)を持つと指摘している。例えば、(6a-b)では同じ *across* という前置詞を使っているが、それぞれの文が表現する移動距離は全く違う(*Ibid.*: 26)。

(6) a. The ant crawled across my palm. 「蟻が私の手のひらを横切って歩いた。」

b. The bus drove across the country. 「バスは国を横断した。」

同様に、(7a-b)でも同じ *across* を使っているが、それぞれの句・文が表現する横断対象の形や性質(7a)も移動経路の形(7b)も全く違う(*Ibid.*: 221-224)。

(7) a. across the river / the square field / the lake 「川を渡って/正方形の土地を渡って/湖を渡って」

b. I arced / zigzagged through the woods. 「私は森の中を弧を描くように/ジグザグに進んだ。」

空間不変変化詞が表現するランドマーク・トラジェクターの形状や大きさなどは絶対視されないというこのトポロジー的性質により、物理空間から抽象的な空間と考えられるものへの拡張が容易に行われるため、不変変化詞の意味は具象から抽象まで幅広い範囲に渡り、カバーし、文脈に応じて多様な意味で使われると考えられる。例えば、(3)~(5)の3つの文を比べると、*in* が徐々に抽象的な関係へと変化しているが、「何かの中にある」という位置や関係の構造は変化していないということが分かる。

図1のモデルは、各分類の共起語の交換可能性も示している。狭義の字義表現は物理空間における存在・運動を指示している限りにおいてはかなり自由に用いることができるが、語彙化されたメタファーになると言語共同体で共有される概念メタファーによる制約を

⁷ 「トポロジー」とは、幾何学のうち、長さや大きさなどには無関係で、曲げたり歪めたりしても不変である空間や図形の性質を扱う「位相幾何学」のことである。例えば円と三角形は、ともに線分とは異なり、図形を構成する線に連続的対応があるため、トポロジー的には同じである。

受け、句動詞では不変化詞とともに用いられる動詞・補部名詞句の自由な交換可能性はさらに低い。狭義のメタファーに含まれるイディオムの場合はこの交換可能性は最も低い。このように、句動詞とイディオムには慣習化が特に強く働き、表現が固定的になっているという共通性がある。句動詞は“pick up”(「選ぶ」など)のように語彙化されたメタファーのレベルで表現が固まったものであり、イディオムは“be up in the air”(「有頂天になっている」)のように狭義のメタファーの部分で表現が固まったものであるが、表現が固まったというのは、全体としての語彙的性質を持つようになったということであり、メタファー処理のモデルの観点から言えば、これらは語彙的な扱いを受ける直接処理をされると考えられる。イディオムは、その背後にある関係性が、通時的に忘れ去られたなどの何らかの理由で、もはや言語共同体内で共有されなくなって希薄化しているのに対し、イディオムを除く狭義のメタファーは、ドメイン間の関係を創造する自由な発想に基づくものであり、統語的關係を持つ語の交換可能性も高く、間接処理されると考えられる。

2 不変化詞のプロトタイプ的な中核語義としてのイメージ・スキーマ

本節では、不変化詞の中核語義は物理空間に関する字義通りの意味であり、不変化詞の意味の広がりやプロトタイプ的な考え方での扱いが適切であると論じる。そして、高度な多様性を示す不変化詞の意味において、物理空間の意味の中心にあるイメージ・スキーマが様々な拡張の基礎を成すプロトタイプ的な中核語義であるであることを論じる。なぜ不変化詞の中核的な意味が空間に関する意味であるということがささも当然であるのかのように論じられているのかということにも目を向けた上で、大多数の従来の研究のように、物理空間の意味が中核語義であるということを理論内的な動機による所与のものとしての扱いで済ませずに、様々な観点から議論を行い、積極的な動機に基づいて論じることが本節の目的である。

2.1. 不変化詞が持つ概念的意味

そもそも不変化詞は概念的意味としての意義(sense)を持つのかということから検討したい。ここで言う意義とは、指示対象としての指示的意味(reference)と対照される抽象的な概念のことである。よく取り上げられる例で言えば、“morning star”「明けの明星」と“evening star”「宵の明星」は意義は異なるが指示的意味は同じ“Venus”「金星」であり、また Sapir (1921: 12)の例を挙げれば、“house”の意義は、実際の無数の家(あるいはその一部)ではなく、それらを包含する頭に浮かぶ概念である。

筆者は次の2つの理由から、不変化詞には狭義の字義表現のレベルからすでに意義、より正確に言えば意義的なものがあると主張する。

1. 一般的に内容語の間に見られる典型的な意義関係が不変化詞においても見られる。
2. 概念としての空間理解が人間の思考において根本的な役割を果たしていると考え

えられる。

1 については、例えば Leech (1974: 110)は、*up/down*, *below/above*などを意味の成分の観点から対立関係の例として挙げ、さらに *over*, *under*, *in front of*, *behind*, *on the left*, *on the right*, *beside*を SPATIAL, DIRECTION, VERTICAL, PRIMARY の意味成分で定義している(Leech 1974: 130-133)。國廣(1982: 22-23)も、Lyons (1977: 206)を引いて、(“denotation”に対する)“sense”の関係に見られる対義語の例として *up/down*を挙げている。また、Jespersen (1922: 138)はもともと「家の敷居を超えて入ってくる」という意味に基づく“pass over the threshold of consciousness”という表現と反対の意味の表現は“be out of the threshold of consciousness”であるはずなのに、成人でしかも学術的な知識を持つ心理学者でさえも幼児のように軽率に *over* の反対は *under* であると思ひ込み、反対の意味の表現として“lie under/below the threshold of our consciousness”などのように言い、さらに‘unconscious’にあたるラテン語として‘subliminal’という語まで作ってしまったという事例を挙げている。さらに H. G. Wells が“above the threshold of conscious thought”という表現を使っていることを引き合いに出し、これは *over* を誤って解釈し、類義語の *above* を使っている例だと指摘している(Jespersen 1922: 138, note 1)。Jespersen が取り上げている例は、まさしく不変化詞の意味を意義として操作している事例だと考えられる⁸。これらの対義語・類義語等の操作は指示の意味を意識せずに意義に対して行われるものである。2 については、例えば Mandler (1991: 417)は、言語習得以前の1歳未満の幼児でも、知覚や感覚運動的な経験から類推的な理解と抽象化によって作り上げた、空間に関するイメージ・スキーマ(個々の具体的な事象から個別部分を捨象し、共通部分を抽象して得られる超抽象イメージ)と呼べるものを使って事物や事態を理解していると報告している(2.3.で詳述する)。

ただし、不変化詞の持つ意義(的なもの)は、名詞などの開放類(open class)の語の意義とは性格が異なり、経験から抽出された概念的なプロトタイプ(2.2.で詳述)としてのイメージ・スキーマだと考えられる。自然界に存在するもののカテゴリーの場合には、プロトタイプがかなり具体的で「もっともよい」例がカテゴリーを支えているのに対し、不変化詞の場合には非常に抽象的な「関係」がカテゴリーを形成している(Herskovits 1988: 281)からである。また、不変化詞が概念的な意味を持つと言っても、あくまで経験に基づく概念であり、そういう意味では、名詞などの他の品詞に見られる「意義」と「指示的意味」の区分における意義とは重なり合わない部分もあると言える。例えば抽象名詞である「平和」などの語とは違い、*in* などの不変化詞は抽象概念だけで概念化することはできない。このような問題はあがあるが、議論を簡便にするため、本稿では不変化詞が持つ「意義的なもの」とでも言うべき概念的な意味を単に「意義」と呼ぶ。

2.2. 不変化詞の意味とプロトタイプ

プロトタイプ理論とは、ごく簡単に言えば、あるカテゴリーに属する成員間に典型的な

⁸ ただし、これらの発話をした人の意識の中では、もはや‘threshold’が多義的別義として「家の敷居」と「閾・しきい値」の2つの意味を持つと考えられていたという可能性もある。

事例(プロトタイプ)と周縁的な事例があることを認め、必要条件だけでなく、典型例が満たす典型条件も認める考え方である。例えば‘bird’のプロトタイプは‘robin’で、‘penguin’は周縁的なメンバーであり(Rosch 1973), ‘climb’のプロトタイプは足だけでなく手も使って苦労しながら登ることである(Fillmore 1982)。初期のプロトタイプ理論では、プロトタイプは実際の指示物であるのかそれが満たすゲシュタルト的な条件なのかがはっきりしなかったが、現在の認知意味論ではプロトタイプは指示物自体ではないとされる(Langacker 1988: 133)。

では、不変化詞の意味にはプロトタイプが認められるのだろうか。プロトタイプは通常、典型性を持つカテゴリーに対して提案されるものである。不変化詞の意味にも典型性を持つカテゴリー構造が認められるのであろうか。これに関して、Rice (1996)は母語話者の大学生を対象に *at/on/in* を使った文を1人10文ずつ書かせるという実験を行った。その結果、全ての前置詞において、書かれた文の半数以上が空間に関する意味であり、典型事例と非典型事例が認められた(詳細は 2.3.で取り上げる)。これは、不変化詞に関しては空間の意味がプロトタイプである意義があるという議論を支持するものであると言える。

ただし、「プロトタイプ」という名称を避ける立場もある。Herskovits (1988: 281)はプロトタイプの性質に関しては一致した見解がほとんどないということと、少なくとも自然類に関してはプロトタイプはかなり具体的で「もっともよい」例がカテゴリーを支えているのに対して、前置詞の場合には非常に抽象的な「関係」がカテゴリーを形成しているように思われるということから、“prototype”の代わりに“ideal meaning”という術語を使った。また、Tyler and Evans (2003: 52) は、特定の空間不変化詞と連想される空間場面にまたがって見られる理想化された心的な表象であり、多くの類似の空間場面からの抽象体であるものを“proto-scene”と呼んだが、これもプロトタイプとしてのイメージ・スキーマのことを指していると言える。

このように、不変化詞の「プロトタイプ」は‘bird’などの類のプロトタイプとは異なり、また他の呼び方を提唱する研究もあるが、本稿では議論を簡便にするため、不変化詞が持つ典型的な空間の意味を「プロトタイプ」と呼ぶ。

2.3. プロトタイプ的な中核語義としての空間のイメージ・スキーマ

認知言語学では不変化詞の「中心的な」意味は物理空間に関する意味であるとされる(Langacker 2002 等)が、認知言語学以外の立場の言語学でも、ほとんど例外なく不変化詞の「中心的な」意味は物理空間に関する意味であるとされる(Quirk *et al.* 1985: 685-687)。しかし、認知言語学以外で物理空間の意味を「中心」として扱うという立場は、理論上の整合性が要請するものであるなど、主に理論内的動機によるものである。また、自身を含む世界に対する人間の認知のあり方を最重要視すると標榜する認知言語学でさえも、十分な裏付けを伴って物理空間の意味を「中心」ととらえているのではない(Rice 1996: 145)。Whorf (1939)が指摘しているように、ヨーロッパの科学・哲学思想においては、そして一般の人々のものの考え方においてさえも、物理空間とそこに厳然として存在するものを媒

介として、非空間的なものや目に見えないものが理解されており、認知言語学もこのヨーロッパ的な発想から逃れることはできなかったわけである。その結果、非空間的な事物の指示のための媒介となる空間が、あらゆるものの理解の中心であるということが全く問い直されることなく前提として組み込まれ、身体経験と外界認知が言語の基盤となるという言語哲学上の前提と組み合わさって、認知言語学では(ほとんどの場合さも当然であるかのよう)物理的空間に関する意味が不変化詞の意味の放射状ネットワークの中心として分析されることが多い。Whorf のホピ語の分析は、言語と文化が非常に密接な相互作用により結びついているのであり、ヨーロッパの世界観とは異なる世界で成立している言語が厳として存在するということを明らかにしているのであり、このことを忘れて、空間が中心でそこからメタファー拡張があると盲目的に言っているのは、足下をすくわれることにもなりかねない。

本稿で議論の対象とするのはまさに Whorf が空間が発想の中心にあると指摘する英語であるが、本小節では、空間が中心であるということに加えて、さらに一步進んで、空間指示の意味が不変化詞の意味の中核を成すプロトタイプであるということをさまざまな観点から積極的に示す。

Tyler and Evans (2003) は、空間不変化詞は多義であり物理空間の意味が“primary sense”だとした上で、空間の場面というのはそこにある要素(トラジェクター・ランドマーク等)間の相互作用を本来的に内包し(例えば *in* が表現する場面は“containment”を内包する)、そのため、(英語では不変化詞によって表現されることが多い)空間の関係は世界において客観的に存在しているというよりは、本質的に概念的なものであるとしている(Tyler and Evans 2003: 50-51)。彼らは Mandler (1991) に言及しながら、ある種の日々生じる経験が意味のあるものであるために、概念的な構造あるいは概念(すなわちイメージ・スキーマ)に再記述されるとしている。筆者の見解はこの Tyler and Evans による概念への再記述の議論と一致するものであるが、筆者はそれに加えて心理言語学の分野における多くの実験の結果や、幼児や学習者の言語習得期の発話データも考慮に入れ、空間的な経験から抽出されたイメージ・スキーマが概念的なプロトタイプとして不変化詞の意味の構造において重要な役割を果たしていると積極的に主張する。(具体的な根拠は、3 節でのデータに基づく議論の中で提示する。)

プロトタイプ性という観点からも、物理空間に関する意味が中核語義だと主張する論拠が得られる。認知意味論では中核語義の条件として、(1)心理的な際立ちの強さ、(2)相対的な使用頻度の高さ、(3)非中心義の理解への入り口になる解釈の上での有利さを挙げ、これらを複合的な要因として中核語義を決定することができ、これらの構造的な重みを持つものがプロトタイプであるという(Geeraerts 1988, 2001)⁹。例えば‘fruit’のプロトタイプはヨーロッパの多くの人にとっては‘apple’や‘orange’だと言う。Geeraerts (2001: 11) はさらに、認知意味論が語彙意味論と違う点は、関連する意味の間の個々のつながりよりも、放射構造

⁹ ただし、Geeraerts (2001: 8) は、プロトタイプは意義と指示的意味の両方のレベルで見られ、実際の典型例も概念も指すとしている。

のような形で語彙項目の意味の全体構造ができているという意味の多面性と、そのような構造の中でプロトタイプが持つ全体のまとまりを支えるという役割を強調しているという点だと指摘している。Geeraerts のプロトタイプの条件を不変化詞の意味の考察に適用すれば、不変化詞によっては物理空間に関する意味が高頻度とは限らず、(2)の相対的な使用頻度の高さについては必ずしも満たされないという問題はあるが、(1)の際立ちの強さの条件と(3)の解釈の上での有利さの条件は満たしていると言える。例えば *in* や *up* という語をイメージするとしたら、ほとんどの場合物理空間に関するイメージを思い浮かべる(2.3.2.で紹介する Rice (1996)の実験を参照)し、ともに物理空間に関する意味を中心におくと不変化詞の意味の広がりが見えやすい¹⁰。したがって、プロトタイプ性の観点からも物理空間に関する意味が不変化詞のプロトタイプであるという主張が支持されると考えられる。

2.3.1. 第一言語習得期の幼児のデータ

表 1 は、子供の話し言葉コーパスである The CHILDES database¹¹から、各年齢期における *in* の補部名詞句の上位 20 項目を抽出したものである。(比較のために BNC¹²の上位項目もあわせて載せた。)

表 1: 各年齢期における *in* の補部名詞句の上位 20 項目

rank/age	-31 ヶ月		31-42 ヶ月		43 ヶ月-		BNC
1	box	84	house	89	house	72	way
2	house	83	water	76	water	61	case
3	water	71	bag	66	room	57	fact
4	bed	67	bed	66	school	54	year
5	room	52	room	54	car	47	area
6	bag	50	box	48	bed	44	country
7	chair	48	mouth	44	bag	41	world
8	car	47	kitchen	38	back	38	time
9	minute	47	car	36	front	36	Britain
10	zoo	25	hand	29	box	32	London
11	mouth	21	minute	29	morning	32	form
12	cup	20	crib	22	middle	29	place
13	kitchen	20	chair	20	kitchen	28	mind
14	mommy	20	sky	20	mouth	28	life
15	pocket	20	hole	19	hand	26	sense
16	wastebasket	20	corner	18	pocket	24	day

¹⁰ 従来の議論の多くは、この条件のみが強い動機になっていると考えられる。

¹¹ <http://childes.psy.cmu.edu/data/>。

¹² the Second Edition of the British National Corpus。現代イギリス英語 1 億語からなるコーパス。

17	air	19	front	17	chair	21	chapter
18	closet	18	trunk	17	minute	21	Europe
19	hole	18	middle	16	mirror	21	house
20	bath tub	16	pot	16	sky	21	England
21	garage	16	truck	16			term

総じて、幼児のデータで挙がっている名詞はほとんどが物理的な場所を示している。3.4.で詳述するように、幼児の場合には句を成句的に覚えて使う場合(8-9)¹³も多いが、それを差し引いて考えても、特に年齢が低いほど、箱状の、あるいははっきり区切られた物理的な容器状の空間を指す語を多く用いている(10-11)ことが分かる。

(8) %gpx: points to another picture of a boy getting out of bed and then playing with a kitten

*MOT: he got out of bed and he's playing with the kitty cat now .

*CHI: he's *in* him **bed** .

%gpx: points back at the picture of the boy in bed

*MOT: yeah [= yes] .

(Suppes (1974); nina20.cha; 28 ヶ月)

(9) *CHI: make tha(t) one first an(d) an(d) we'll do that *in* a **minute** !

*INV: ah wait till you see your brother's gonna [: going to] get at them .

(Henry (1995), Wilson and Henry (1998); david08.cha; 32 ヶ月)

(10) *FAT: some of her toys are packed ?

*CHI: yeah .

*FAT: in what ?

*FAT: what are they in ?

*CHI: *in* um [//] *in* big **box** .

*MOT: that's right .

(Bellinger and Gleason (1982); dinner¥patricia.ch; 34 ヶ月)

(11) *CHI: I going *in* another **house** xxx .

(Suppes (1974); nina38.cha; 34 ヶ月)

年齢が上がると少し拡張された例(12-14)が見られるようになる。

(12) *CHI: xxx what that ?

*MOT: that's the band_aid .

*CHI: no that thing *in* the **middle** of the band_aid .

%com: nina points to the gauze pad in the center of the band-aid .

*MOT: that's the part of the band_aid that you put over the hurt .

¹³ CHILDES のデータのイタリックとボードは筆者による。その他の表記は元のデータのままである。また、末尾の括弧内には、引用したデータが含まれるコーパスに関する文献・データ収録ファイル名・子供の年齢を付している。以下の CHILDES のデータについても同様。

(Suppes (1974); nina36.cha; 34 ヶ月)

(13) *CHI: does dis have a door *in back* of it ?

(Brown (1973); adam¥adam40.cha; 47 ヶ月)

(14) *CHI: they all have to stay *in order* .

(Bliss (1988); norwilli.cha; 73 ヶ月)

しかし、文全体を見ないと不変化詞部分が狭義の字義表現として使われているのか語彙化されたメタファーとして使われているのか(あるいは狭義のメタファーとして使われているのか)が判断できない場合も多いのは確かであり、表 1 のように補部名詞句のみを切り離したデータに基づく議論だけでは問題があることも事実である。そこで、動詞として非常に汎用性の高いごく基本的な繫辞である *be* 動詞が使われている(*be + in* のパターン)の 3 歳半から 4 歳半まで(43 ヶ月-54 ヶ月)の子供の用例 329 例を全て文脈の中で確認した。結果、そのうちの約 300 例は(15a-b)のように、物理的に「何かの中に」という物理的空間に関する意味を持つ狭義の字義表現であった。

(15) a. *CHI: what's *in* that bottle ?

*INV: those are some tadpoles .

(Henry (1995), Wilson and Henry (1998); john03.cha; 48 ヶ月)

b. *MEG: it's too late .

*MEG: cause those guys **are** already *in* the bath+room .

(Gathercole (1986); 10.cha; 46 ヶ月)

これは、*be* 動詞という非常に汎用性の高いごく基本的な繫辞を伴う場合でも、子供は不変化詞 *in* を専ら狭義の字義表現で用いているということを示している。

言語習得の観点から空間のイメージ・スキーマの重要性を示した研究もある。幼児はたいてい 9~18 ヶ月で歩き始めるが、Mandler (1991)は、まだ歩く前の幼児(5-8 ヶ月)でさえも、*in* に相当する CONTAINMENT, *on* に相当する SUPPORT の概念を理解しているという実験¹⁴を紹介している。子供はまず知覚や感覚運動的な手順により身の回りの事物や事態を認識し、細部に関する情報はそぎ落としながらも空間的な構造はその本質的部分として保持しつつ、イメージ・スキーマの形に構築し、さらにそれを言語に合うように必要に応じて再構築すると主張している(Mandler 1991: 418)。これは空間のイメージ・スキーマがいかに関人の思考の根本を形成しているかということを示している。

2.3.2. 成人母語話者のデータ

成人母語話者に関する心理言語学的な実験もある。ここでは Rice (1996)の実験を 2 つ取り上げる。

1 つ目の実験は、アメリカの母語話者の大学生に、指定した不変化詞を使って自由に作文させるというものである(Rice 1996: 148-152)。Rice は不変化詞の意味を *spatial* (例: *I fell*

¹⁴ 容器に物を隠したりして子供の反応を確認する実験。

asleep at the library.), temporal (例: I'll be home at 10 p.m.), abstract (例: At least it was hers.), phrasal verb (例: What are you looking at me for?)に分類し、それぞれの範疇への分布状況を示している。その結果が表 2 である。

表 2: アメリカの大学生の不変化詞を使った自由作文における不変化詞の意味の分布

	Spatial	Temporal	Abstract	Phrasal Verb	TOTAL
<i>at</i>	57	21	16	9	100
<i>on</i>	57	9	28	6	100
<i>in</i>	60	7	33	--	100

空間の意味が想起される割合が明らかに高く、この結果は空間に関する意味・用法がプロトタイプ的な中核語義であるという主張を支持するデータであると言える。

2 つ目の実験は、*at/on/in* に関して、カナダの大学生に典型的な空間・時間・抽象の用法の“target sentence”(基準となる文)と、コーパスから抽出した“probe sentence”(調査対象の文)を比較させ、それらの類似度を“COMPLETELY DIFFERENT”と“ABSOLUTELY IDENTICAL”という二極の間で評価させるという実験である(*Ibid.*: 146-149)。その結果、前置詞の用法は空間と非空間で二分されるのではなく、どの程度空間的かという度合いが異なるということが分かった。これはプロトタイプを中心とする範疇の概念と合致するものである。

これらの Rice の実験結果からも、不変化詞の意味の中核がプロトタイプ的な空間のイメージ・スキーマだという想定が妥当であるということが確認できる。

2.4. イメージ・スキーマを体現した狭義の字義表現

プロトタイプとしての空間の概念であるイメージ・スキーマを具体化した表現が狭義の字義表現である。具体的には以下のような例が該当する。

- (16) a. The blind is *down*. 「ブラインドは下がっている。」(誰が見てもブラインドが下がっている状態を描写している。)
- b. walk *down* the hill 「歩いて丘を下りる」(誰が見ても丘を下りて行く様子を描写している。)

- (17) The shop is *across* the street. 「店は通りの向こう側だ。」(物理的移動は伴わないが、*across* のイメージ・スキーマの到達点部分に特に焦点を当てている。)

なお、石井(2004: 159-160)では(16)は「客観的に知覚可能な物理的空間に関する意味」として本稿同様狭義の字義表現として扱ったが、(17)については「客観的に知覚可能な物理的空間をベースとしながら、客体の移動を伴わず、話者である概念主体の主観的な心的移動のみがあるような意味」として語彙化されたメタファーに含まれる「心的知覚場に関する意味」として扱った。しかし、本稿ではそれを改め、(17)も狭義の字義表現と考える。トラジェクター・ランドマーク・存在のあり方の全てが客観的で物理的な様態だからである。確かに(17)が表す事態においては物理的な移動はないが、概念主体の心の中での視点の移動があると考えられる。経路から終端へのこの焦点の変化はイメージ・スキーマ変換と呼

られることや、メトニミーによる意味拡張として分析される(Taylor 1989: 137)こともある。しかし本稿では、2つのイメージ・スキーマがあり、それらが変換されると想定するイメージ・スキーマ変換という考え方ではなく、イメージ・スキーマのトポロジー的継承と背景化そして主体化で説明するのが妥当と考える。すなわち、何かを越えた向こう側という *across* のイメージ・スキーマは厳然として有効であり、その経路に沿った視線あるいは意識・注意の移動は主体的なものであり、その結果経路は背景化され、終端だけが焦点化される。確かに抽象的な移動と考えられる主体化は存在するものの、終端地点(通りの向こう側)での存在のあり方は物理的で具体的で客体的なものであり、(17)は狭義の字義表現と考えるに十分であると考ええる。

不変化詞が持つ静的な場所と動的な動きの意味に関して、Rice (1996: 138-141)は、Lakoff (1987: 416-461)が提案している *over* の意味のネットワークのモデルにおける中心的な意味は“The plane flew *over*.”に見られる動きのある意味だとしているがこれは何らかの動機に基づくものなのかが不明であると指摘し、方向性のある動きと静的な場所の意味は一方が他方からの拡張であるという見解や、両者を分けて扱う考え方(Jackendoff 1990: 88-91)も示した上で、韓国語・英語とも最初に習得されるのは場所ではなく動作である傾向があるという Choi and Bowerman (1991: 96-97)の報告を紹介している。上述の(17)における *across* の考え方も、動作が基本であるというこの立場と一致するものであるが、詳細については別途検討が必要であろう。いずれにしても、本稿では、物理空間を指し示す(17)のような場合は狭義の字義表現に分類されると考える。

事象の物理性という制約を満たしているということだけが狭義の字義表現の共起語彙の制約になるため、共起語(動詞・補部名詞句)を自由に選択できる交換可能性は概して高い。

2.5. 狭義の字義表現に分類されるコーパスからの具体例

実際の言語使用における狭義の字義表現の具体例を挙げる。BNC で不変化詞 *in* と *at* を含む文 50 例を抽出した¹⁵ものを文脈の中で確認して、該当の不変化詞の用法を狭義の字義表現、語彙化されたメタファー、狭義のメタファー(該当例なし)、その他(固有名の一部と話し言葉コーパスにおいて断片的であり確定できないもの)に分類した¹⁶結果、狭義の字義表現に分類されたものが(18-19)¹⁷である。

(18) a. Through the window, they saw empty glasses on the bar, dishes *in* the sink, the TV on.

(ABS 1161)

b. He was born *in* Edinburgh, (B1D 390)

¹⁵ 抽出方法は、まず *in* と *at* を含む文を BNC から全て抽出した。その中での行番号が行数の 50 分の 1 から小数点以下を切り捨てた値で割り切れる場合にその文を例として採用した。例えば *in* を含む文は 1,466,898 文あったため、その 50 分の 1 から小数点以下を切り捨てた値である 29,337 で行数が割り切れる文(29,337 文目、58,674 文目、等)を例として取得した。

¹⁶ 1 文中に該当不変化詞が複数回出現する場合は最初のものだけを分類の対象とした。

¹⁷ 末尾の括弧内には引用した文の ID を付し、文が長い場合には適宜省略し、前後の文脈が必要なものは適宜付し、不変化詞はイタリックにより強調した。以下の BNC からの用例についても同様。

- c. Some of the lucky ones took to their parachutes and spent the rest of the war *in* Germany — (B3F 114)
- d. Behind us *in* the auditorium the show was about to begin, (C8E 3062)
- e. Of the children Rachel was the worst injured, with tiny pieces of glass from the windscreen *in* her eyes, (CDS 853)
- f. ..., France had spent too much blood and treasure for the Vietnamese to expect the sort of independence that was to be found *in* the British Commonwealth. (EFA 819)
- g. The king-list also claims that he was first buried *in* Dunkeld but that ‘Iona holds his bones’; if so, he was the last Scottish king buried there. (GTC 93)
- h. Pacific
Q3 losses down by almost a half at \$2.4m produced a deficit \$14.8m lower at \$5.2m. Very good results *in* both Australia and New Zealand -- which produced a profit. (HB4 930-932)
- i. They were racing for records at the Iffley Road track *in* Oxford... .. (K1T 2580)
- j. While strikes might be a thing of the past, at least *in* most ports, there has been a marked increase in accidents and sickness rates reported by several operators. Unfortunately, systematic, industry-side data is now a thing of the past for the port industry following the demise of the National Dock Labour Board and the National Association of Port Employers, so it is impossible to determine whether this is a specific or general phenomenon. (K9V 502-503) (この例は「港では」という場所の提示を主目的とした表現だと考えられるが、「港湾という世界・業界では(ストライキは過去のものだ)」という語彙化されたメタファーへの橋渡しになるような例である。)
- (19) a. Next door, two elderly ladies from the Esperanto Society smiled more in hope than expectation *at* every preterpasanto — or passer-by, as you or I might say. (A4G 18) (前置詞付き動詞(prepositional verb; Biber *et al.* 1999: 403) “smile at”)
- b. Philip looked *at* her. (ABX 1317) (前置詞付き動詞“look at”)
- c. ..., as SCCs were formed, so each would appoint a number of ‘Friendly Visitors’ to interview the school-leavers and their parents *at* home (B1T 373)
- d. ..., Mar's and Argyll's main armies were left uneasily eyeing each other *at* Stirling, (BNB 281)
- e. *One of the fastest SX's we've ever looked at.* (WHAT PERSONAL COMPUTER MAGAZINE)
The Intel 386sx™ processor runs at 20Mhz making it one of the fastest SX's on the market. (CFT 1823-1825) (前置詞付き動詞“look at”)
- f. As the M.D. indicates, he was a physician, and the committee specified that Griffith J. Griffiths, who had been appointed to Goldington district, and who later became the

senior surgeon at Bedford General Hospital, should be co-opted in cases where major surgery was required. Guy Storrs, the medical officer of Bedford No. 1 district, was to join Griffiths on being appointed consultant orthopaedic surgeon *at* Bedford. (CMG 1105-1106)

g. Glycine *at* position 79, which is present in all H1 molecules, is involved in making a sharp bend in the polypeptide chain, in going from the end of helix III into the β -hairpin. (CRM 10937)

h. On 24th–30th September, there will be an exhibition of oil paintings — ‘Art Directions’ — by Adrian Bailey, Angela Landels, and Julia Matcham, *at* the Stephen Bartley Gallery, 62 Old Church Street, Chelsea, SW3. (ED9 947)

i. The men *at* the ramparts had often tried in vain to tempt one of the stray artillery bullocks near enough to capture it, (EFW 1312)

j. A hush fell over the room, and the young man pulled back, staring *at* Connor. (FPM 2008) (前置詞付き動詞“stare at”)

k. But the best was saved till last, when Western province and Eastern province produced an excellent Benson & Hedges day/night final *at* the packed Wanderers, just a couple of days after the South Africans had returned from the World Cup. (FT9 1064)

l. Francis Egerton, Duke of Bridgewater, hired James Brindley, a millwright, to cut a new waterway from his coal mines *at* Worsley to Manchester. (G2M 149)

m. *At* Oxford he became lecturer in the philosophy of mathematics in 1945 (reader, 1950), (GT9 737)

n., that's why he's working *at* our place for a year or so. (H8L 1886)

o. She had no urge whatever to throw herself *at* Mitch. (HGK 2943) (この例は「身をもたせかける」という物理的なことを指した表現だが、「(身をもたせかけて)相手の気を引く」という語彙化されたメタファーへの橋渡しになるような例である。)

p. He should legislate now for a referendum to be held once the negotiations *at* Maastricht are complete. (HHW 12964)

q. Furthermore, teachers must get used to seeing themselves on film. Mary pointed out that it takes a while to become objective and to look *at* yourself without flinching. (HNW 741-742) (前置詞付き動詞“look at”)

r. Waste will be sorted centrally *at* a waste stream sorting plant; easily recyclable materials such as metals, glass and plastics will be sent to reprocessing plants in the region; (J39 623)

s. on Saturday they won *at* London Irish in the league... ... (K1B 3078) (London Irish はスタジアムを指す)

t., so don't go yelling it tomorrow *at* school, keep quiet (KSV 5949)

今回調べた各 50 例の中では、狭義の字義表現として用いられている *in*(18)は 10 例, *at*(19)

は 20 例であった。

3. 不変化詞の意味の拡張

3.1.3 種類の拡張

これまでメタファーに基づく「拡張」として呼んできたものは、厳密には以下の 3 つに下位分類することができる。

- (1) 言語的な意味に見られる拡張: 図 1 に示したモデルのように、共時的に特定の語の意味を取り上げて論じることによって示される理論上の拡張関係。
- (2) 解釈の現場での拡張: 狭義のメタファーに直面した時や、成人母語話者以外の子供や学習者が(成人母語話者は比喩とはしない)未習得の比喩的な側面を持つ意味に直面した時に行う臨時の拡張。
- (3) 習得時の拡張: 言語習得段階で見られる、比喩的な側面を持つ意味を新たに習得する時に見られる拡張。

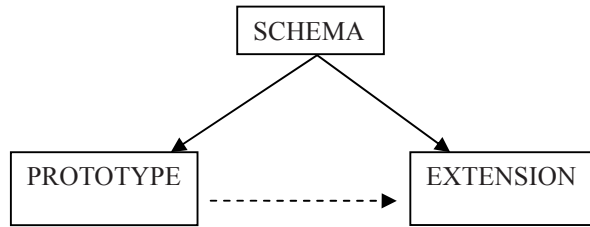
なお、(2)と(3)は(1)の考え方に基づいている。従来のプロトタイプ意味論の研究ではほとんどの場合(1)のみを論じ、メタファーの研究では主として(1)と(2)を論じ、第一言語習得とメタファーに関する研究では(2)と(3)を中心に論じてきた。以降、3.2.で拡張には方向性があるということを論じ、3.3.~3.5.で、(2)と(3)の拡張について、成人母語話者・第一言語習得期の幼児・第二言語習得中の学習者の観点から詳述する。その上で、3.6.で、この拡張と、特別な過程なしに発話の解釈がなされるレベルの広がりとの関係について検討する。

3.2. 拡張の方向性

本小節では、不変化詞の意味のメタファー拡張は、前小節で挙げた(1)(2)(3)の全ての拡張関係が、物理空間に関するプロトタイプの意味から比喩的な意味への排他的に一方向的なものであると主張する。

ほとんどの先行研究では、拡張の方向性に関して、拡張の起点が中核語義であるということが当然視されており(2.3.を参照)、拡張の方向性については議論すらされていない。メタファーにおいて拡張の方向の起点は人間自体あるいは人間の身の回りのことであるとする指摘(池上 1975: 244)も見られるが、やはり方向性については問題視されていない。Langacker などのネットワーク・モデル(図 2)では、確立度が高く、際立ちの度合いが高く、最初に習得されるなどの特徴を(全てではないにしても)持つプロトタイプがまず存在し、そのプロトタイプとの間に類似性が認められるが同一ではないものが、拡張された意味として生み出され、同時にその類似性のみを抽出したスキーマ的な意味が生まれると考える(Langacker 2002: 271-272)。

図 2: プロトタイプとスキーマの関係



このモデルではプロトタイプをまず所与の出発点とするために、拡張された意味からプロトタイプへの類推は理論上起こりえず、本稿で主張する拡張の一方向性と、結果としては一致する。しかし、プロトタイプがまずありきという想定には筆者は懐疑的である。なぜならば、第二言語習得の場合のみならず、第一言語習得の場合でも、全ての語がプロトタイプから意味が習得されるわけではないからである。例えば以降の議論で見ると、第二言語習得中の学習者は教科書に出てきた順などで語の意味を覚え、第一言語習得期の幼児は高頻度のものは句の単位で覚えることもある。本稿では、言語習得時には不変化詞の意味は必ずしもプロトタイプから学習されるとは限らず、拡張された意味から学習されることもあるが、拡張の方向性はプロトタイプから非プロトタイプの方に限られると考える。

第二言語習得時の中間言語に関して、Ellis (1999: 474)は個々の語や句、語句の意味や用法などを互いに関連付けることなく学習することを「項目学習」(item learning)と呼び、規則やメタ言語的な知識を学習して、各項目や知識の間の関係を知った上で全体像を得ることを「体系学習」(system learning)と呼び、その上で第二言語習得時には項目学習の積み重ねがあり、その後に体系学習が行われて、知識が再構築されると論じている。Ellis のこの議論を、不変化詞の意味のメタファー拡張は一方向的であるという筆者の主張と組み合わせ、プロトタイプから先に(項目)学習する場合を「プロトタイプの一次的習得」と呼び、拡張された意味から先に学習し、後からプロトタイプを学習する場合を「プロトタイプの二次的習得」と呼ぶとすると、不変化詞の意味の体系学習が行われるためには、一次的習得であろうと、二次的習得であろうと、その不変化詞のプロトタイプの習得が必須であるということである。一次的習得が行われた場合には拡張された意味は(少なくとも発信ではなく理解の際には)類推によって引き出すことが可能になるため、この時点で、語の意味の重要な部分の習得は行われたことになる。一方、拡張された意味だけを先に学習している場合には、プロトタイプを後から明示的に学習(二次的習得)し、それに基づく体系学習が行われて、初めて語の意味の習得が完成すると言える。

空間から時間への拡張の一方向性を明示的に主張している研究がないわけではない。例えば初山(1995)は、用法上の制約がない、あるいは相対的に少ないものをプロトタイプの意味と認定するという、共時的なプロトタイプの意味の認定方法を踏まえて、「遠い」・「長い」などの空間と時間の両方の意味を持つ日本語の形容詞の多くは、前者がプロトタイプの意味であり、意味の転用は空間から時間へ一方的であるという主張をしている。山田

(1981: 76)は、世界の諸言語で、具体的な場所表現に使われる機能語の概念を使って抽象的な時間表現が生み出されるとしている。また Gibbs (1994: 167-169)は、時間表現は空間表現をもとにメタファー拡張されるのではなく、両者に“thematic parallelism”「主題の平行性」があり、結果として両ドメインにまたがる抽象的な関係が形成されるという“thematic relations hypothesis”「意味関係の仮説」(Jackendoff 1983: 188-211)を紹介した上で、しかし時間には本来の前・後面はないためにこの考え方は否定され、やはり時間は空間をもとにメタファー的にとらえているということになると言う。

本稿ではさらに包括的に、様々なデータをもとに、不変変化詞の意味は物理空間に関するプロトタイプ的な中核語義からの一方向的なメタファー拡張によって、語彙化されたメタファー、さらには狭義のメタファーにまで広がるのであり、逆方向への拡張は一般に見られないと主張する。

3.3. 成人母語話者に見られる拡張

成人母語話者に見られる拡張は 3.1. で挙げた(2)の解釈の現場での拡張に関係する。

まずは成人母語話者の不変変化詞の使い方を概観するために、BNC から抽出した、成人母語話者が *in/at/on* の補部に使用する名詞(補部名詞句から修飾語句を除いて見出し語化したもの)と各不変変化詞の直前に用いる動詞(見出し語化したもの)の上位 30 項目のデータ(表 3)を確認する。

表 3: 成人母語話者のデータで *in/at/on* と共起する名詞・動詞上位 30 項目

<i>in</i>		<i>at</i>		<i>on</i>	
<i>in</i> + NP	V + <i>in</i>	<i>at</i> + NP	V + <i>at</i>	<i>on</i> + NP	V + <i>on</i>
way	be	time	look	side	be
case	come	end	be	hand	go
fact	live	home	stare	basis	base
year	go	moment	arrive	ground	come
area	work	level	aim	way	depend
country	find	stage	work	occasion	work
world	use	point	glance	day	get
time	do	school	smile	May	sit
Britain	result	work	start	March	take
London	read	rate	stand	April	concentrate
form	see	night	sit	October	carry
place	get	beginning	stay	January	put
mind	hold	age	do	November	rely
life	set	top	hold	September	focus
sense	sit	back	come	June	hold

day	make	meeting	go	December	move
chapter	lie	cost	get	July	lie
Europe	appear	risk	laugh	February	stand
house	have	price	gaze	Saturday	hang
England	show	bottom	live	August	spend
term	put	university	appear	floor	call
hand	bear	centre	play	Sunday	insist
studio	stand	foot	make	page	have
position	occur	door	run	road	comment
part	say	side	stop	face	live
school	die	expense	see	issue	turn
word	take	start	have	back	pass
context	stay	speed	glare	earth	fall

表 3 に挙がっている語は各不変化詞との共起頻度が高いだけでなく、不変化詞との連語としての結びつきが非常に強い項目も多い(*in this way/case, in fact, look at, be based on* など)。表 3 を概観すると、狭義の字義表現、語彙化されたメタファー、そして本稿では語彙化されたメタファーに分類されると考える時間の表現¹⁸を構成する語が幅広く見られる。表 3 は共起する名詞と動詞のみを取り出しているが、実際にはどのような形で使われているのかということを見るために、*in*+補部名詞句の例を BNC から取り出したものを(20)に挙げる¹⁹。

- (20) a. The existing income tax system *in* this **country** is more complex than in other countries. (ED5 1685)
- b. She lived *in* the **house**. (EFP 875)
- c. It's important to choose a colour scheme that works well *in* both the living and dining **areas**. (EDG 417)
- d. Of course there is plenty of room for disagreement *in* this controversial **area**. (ED6 1491)
- e. The London Underground is the second largest metro system *in* the **world**. (EDN 2125)
- f. Certainly, received pronunciation does have a dominance in certain circles, particularly *in* the **worlds** of the mass media, education and commerce. (EEB 552)
- g. It is stressed *in* two specific **ways**. (EFT 1608)
- h. I believe that it is important *in* most **cases** for each language to have parity; ... (FA3 1324)

¹⁸ “on May”などは不変化詞と名詞(の 1 回以上の繰り返し)という結びつきで調べたために、“on May 5”(‘5’は名詞ではなく基数(CRD)のタグが付与されている)などの表現の一部のみが取得されたものである。表 4 についても同様。

¹⁹ ボールドによる強調も筆者による。以下の BNC の用例についても同様。

- i. I have *in fact* used these texts many times for study purposes in a variety of settings: ... (FAY 889)
- j. The question hung unanswered *in* his **mind**. (HJD 1617)
- k. At the same time, where demand is low, services can be withdrawn easily, and this has been the most characteristic trend *in* recent **years**. (FB2 1215)
- l. He could be out *in* three **years** if all went well. (HJC 1276)

容器的あるいは境界のある空間ととらえられる名詞を補部としてとる(20a-f)・(20j)の例には、物理空間を指すもの((20a-c)・(20e))も抽象空間を指すもの((20d)・(20f)・(20j))も含まれている。また、*in* の補部名詞句の多くは(20g-l)のような高頻度の連語表現にも使われるが、これらは実際は容器でないものを容器的な抽象空間ととらえる概念メタファーにより拡張されて得られる抽象的な用法である。また、(20k)の‘years’が一定の時間幅を指しているのに対し、(20l)の‘years’はその幅の限界(境界)を指すという違いがあるが、どちらも「年」という時間を容器的な抽象空間ととらえる概念メタファーに基づく、語彙化されたメタファーの表現だと言える。

同じく BNC からの動詞+*in* の例を(21)に挙げる。

- (21) a. Stewart **came** *in* sweating and gasping, almost too desperate to form words. (A0N 2146)
- b. And news **came** *in* that all local service personnel in cinemas, pubs and dance-halls had been ordered back to their units. (AK9 1991)
- c. She said the woman had **lived** *in* the house for about nine years and the man for about two. (AKR 70)
- d. 'He had long been in a bad state of health, which he took no care to repair but on the contrary **lived** *in* such a manner as greatly promoted the disorders he had had long upon him, this brought on the Flux which put a period to his life' (Cook). (GSY 1559)
- e. It suddenly seemed important to keep the conversation as close as possible to something you might have **read** *in* an old book. (GUU 137)
- f. A gas leak in the gas discharge cooler in the gas compression module then **resulted** *in* the general alarm sounding. (K5D 10793)
- g. Overaccumulation had **set** *in*. (K8U 956)

(21a)・(21c)は基本的な動作・状態を指す動詞と共起している一方、他の例は程度に差はあるが抽象的であり、(21g)はイディオムである。他に、表3で挙がっている‘get’は典型的には“**get in touch with**”のような複数語からなる動詞相当表現を構成し、‘bear’も“**bear in mind**”のような例で多く用いられている²⁰。

²⁰ ただし、動詞が表現するほとんどの動作や状態は、極めて自然にどこかの場所で起こりうるものであるため、表3に見られる動詞が必ずしも常に(21)の例のように連語的な結びつきを持つ表現を構成するわけではない。また、The cases **came in** a rush, ... (A30-159)のような come と *in* が共起はしているが連語的な結びつきによるものではない例も含まれる。

Quirk *et al.* (1985: 686)は, *in* は(a)(*out of, amid, amidst* とともに)位置(position)からメタファー拡張される状態(state, condition)を, (b)(*out of, amid, amidst* とともに)包囲(enclosure)からメタファー拡張される抽象的な包含(abstract inclusion)を, (c)(*on* とともに)位置(position)からメタファー拡張される参加(membership, participation)を意味すると指摘しているが, (21)の例でそれらに対応するものを考えると, (a)の状態は(21d)・(21f)・(21g)に, (b)の抽象的な包含は(21b)と(21e)に対応する。

また, Pustejovsky (1995: 232)は, ‘hospital’や‘school’のように目的を持つと考えられる名詞は, 無冠詞の単数形で *in* や *at* などの補部として現れると, 場所だけではなく, その名詞から連想される活動またはその機能として特徴づけられる出来事をも示すと述べている。すなわち, 不変化詞の補部で名詞がこのように無冠詞の単数形で使われている場合は, 狭義の字義表現から語彙化されたメタファーへの橋渡しの役割を果たしていると考えられることが多いことになる。このような表現が実際にはどのくらい高頻度で用いられているのかを確認するために, 不変化詞と名詞という連続する 2 語 (bi-gram) を BNC からすべて抽出し, 1%以上の相対頻度のものを挙げたのが表 4 である。

表 4: BNC 中の不変化詞+NP の bi-gram で 1%以上の生起度数のもの

in fact	16263	in January	3124	in February	2580
in Britain	8203	at work	3087	on Nov.	2521
in London	8146	on March	3085	on Sept.	2521
at home	7262	in September	3068	on Jan.	2516
in England	5634	in May	3059	at school	2468
in studio	5039	in April	3040	on Dec.	2412
as part	4842	at night	3033	for years	2409
in Europe	4695	in October	2996	to London	2399
in mind	4031	in France	2990	to bed	2395
in Scotland	3871	in March	2942	to work	2361
in practice	3623	into account	2924	on Sunday	2359
in time	3557	on June	2885	in August	2332
in turn	3544	in July	2819	in love	2331
in chapter	3362	in December	2745	in south	2244
on Saturday	3332	in November	2718	in contrast	2238
on May	3238	on Oct.	2677	for people	2214
in June	3157	on July	2637	on Feb.	2213
on April	3132	in new	2595	in America	2163

時間表現, 成句, 抽象的な関係を表す項目が多いが, 上述の橋渡しの役割を持つ表現は, “at home”(“feel at home”「くつろぐ」)や“at work”などの例から分かるように, 高頻度であることが確認できる。

これらの成人母語話者のコーパスのデータから、狭義の字義表現が中核でそこから一方向的な拡張があるということを直接的に示すことは難しい。しかし、少なくとも、狭義の字義表現・橋渡し的な役割を持つ表現・語彙化されたメタファーが混在していることは明らかになり、(18-19)に見られた橋渡し的な表現も考慮に入れると、ここに連続的推移を見出すことはできる。

また、1.1.で取り上げたメタファー解釈のモデルの観点は、狭義の字義表現から語彙化されたメタファーへの一方向的な拡張を(間接的にではあるが)支持している。すなわち、筆者のモデルでは、成人母語話者は字義通りの意味と語彙化されたメタファーは広義の字義表現として区別なく扱うと想定しているが、メタファー解釈のモデルでも、直接処理モデルと間接処理モデルのいずれも狭義の字義表現にアクセスすることを前提とし、広義の字義表現と狭義のメタファーの間に解釈のモデルの使い分けが見られるとする(Blasko and Connine 1993: 295-297)ことから、成人母語話者が語彙化されたメタファーを理解する場合であっても一方向的な拡張の関係が機能していると考えられるのである。

さらに、2.1.で述べた Jespersen (1922: 138)の“over the threshold”の例も、大人も空間の概念で不変化詞を理解する傾向があるということを示すものであり、このこともまた、成人母語話者が行う解釈の現場での拡張も中核語義を出発点として行われるという議論を支持するものであると言えよう。

3.4. 第一言語習得期の幼児に見られる拡張

第一言語習得期の幼児に見られる拡張は、3.1.で挙げた(2)の解釈の現場での拡張と(3)の習得に関する拡張に関係する。2.3.1.で示したように、概して第一言語習得時期の子供は、多くの空間不変化詞に関して字義通りの意味としての物理的な意味から習得していく傾向があるが、子供は当然大人の発話をもとに言語を習得するのであるから、語彙化されたメタファーを最初に覚えて口にすることもある。幼児の接する大人の発話には、大人は比喩とは意識していない語彙化されたメタファーが多く含まれているからである。認知言語学における言語習得研究では、子供は文脈において分かりやすく、使用頻度が高く、そして経験に基盤を持つ、プロトタイプの中核である具体的な表現から習得し、後にそこから拡張されたカテゴリー・メンバーやその拡張能力そのものを習得していくということになる(山梨 2000: 257-259)。そのため、(プロトタイプから習得するという点はおくと)上述の大人の発話に多く現れるものを覚えて口にするようになるというのは当然のことである。しかしここで問題にしたいのは「習得」ということである。句で覚えたとしてもその意味を理解して真に「習得」しているわけではないと考えられる。このような例が Jespersen(1922: 138)に見られる。Jespersen も、幼児は初めのうちは“go to school”や“at dinner”などの句で言語を覚えると主張しているが、幼児の間違いとして(22)の例²¹を挙げている。

(22) a. 母: I will wash you in a moment.

²¹ イタリックと下線の強調は筆者による。

子: No, you must wash me in the bath.

(子は‘moment’が場所だと思った。)

b. 教師: What is an average?

生徒: What the hen lays eggs on.

(生徒は‘average’が場所だと思っていた。)

これらはともに前置詞句(と特にその補部名詞)を物理空間の意味に誤解している例である。

次に Friederici (1983)による、ドイツ語を対象言語とした、機能語に対する子供の反応を見る心理言語学的な実験²²を取り上げる。Friederici (1983: 721)はまず前置詞を以下の3つに分類した。

1. 語彙的な前置詞(lexical preposition): 空間関係の意味情報を持つが、前置詞句の主要部として構造的な情報も持つ。
2. 義務的な前置詞(obligatory preposition): 構造的な下位範疇化の要請を満たす。
3. 動詞不変化詞(verb particle): それ自体意味情報を持つが、先行する動詞の意味の変化に寄与する。

その上で様々なことを明らかにした。

- 5歳・7歳の子供は、語彙的な前置詞よりも義務的な前置詞・動詞不変化詞への対処において大きな困難を覚える。8歳の子供の場合は5%有意は認められないもののそれでもやはり同様の傾向がある。(Friederici 1983: 731-732)
- 8歳・9歳の子供は、語彙的な前置詞・動詞不変化詞よりも義務的な前置詞への対処において大きな困難を覚える。義務的な前置詞は、語彙的な前置詞に見られるそれ自体の意味は持たず、動詞不変化詞に見られる先行する動詞に対する意味の変化も持たないためと考えられる。10-11歳でこの差は消えるが、それでもこの時点でさえも閉鎖類(closed class)の語の扱いには驚くべきほど大きな困難を示す。成人は意味的な内容とは独立した閉鎖類の語を素早く扱うための特別な認識過程²³を持っていると考えられるが、上記の実験により、この能力は非常に遅い段階で発達するということが示された。(Ibid.: 725-727)
- 閉鎖類の語の語彙的な側面の処理が可能な場合、すなわち意味的に関連のある文脈における語彙的な前置詞と動詞不変化詞一般の場合には、誤り率は主として統語的な側面が処理される場合よりも低い。(Ibid.: 735)
- 閉鎖類の語の扱いの発達、それらに対する子供の計算能力が、可能な意味の解釈から、より自立的なものになる過程としてとらえることができる。統語的な処理が自動的に機能し、解釈の要因によって影響されなくなった時に発達が完了する。(Ibid.: 737)

Friedericiの実験はドイツ語を対象としたものであり、上記の考察が英語にも完全にそのま

²² Friederici は単語聞き取り課題(word-monitoring task)などによる実験を行った。

²³ Friederici はメタファーの直接処理のことを想定しているわけではないが、メタファーの処理モデルの議論とも重なり合う部分がある。

ま適用できるわけではない。しかし、Friederici は個々のドイツ語の不変化詞について記述しているのではなく、閉鎖類に属する語一般を対象として論じているのであり、この実験結果を本稿の議論を支持するものとするのは妥当であろう。

また、2.3.1. で見た CHILDES のデータが示唆するのは、幼児が言語を習得する初期段階においては、不変化詞は狭義の字義表現として専ら物理的な移動や存在といった具体的な指示に用いられ、子供が成長して言語能力すなわち認知能力が発達し、慣習的な概念メタファーを身につけるにしたがい、抽象的な関係や状態を指すためにも用いられるようになるということである。不変化詞は語彙化されたメタファーの用法を多く持ち、(狭義のメタファーは子供の生活現場では発せられることがほとんどないと考えられるが、)語彙化されたメタファーの表現や事物の関係は言語習得期の子供の周りにあふれているにもかかわらず、子供はこのような発達過程を示すのである。

そして、子供は大人の発する言葉を意味は分からずに覚えて発する(項目学習する)ということも考え合わせると、物理空間に関する中核語義を先に学習(プロトタイプの一次的習得)している子供が隣接する基本的な語彙化されたメタファーを理解するのは容易(Gibbs 1994: 416-417)だが、先に比喩的な用法を句で覚えていたとしても、その意味は理解しておらず、中核語義を習得(プロトタイプの二次的習得)して知識の再編が行われる(体系学習が行われる)までは広義の字義表現全般の理解には困難があると結論付けられる。そしてこれは拡張が働く方向は物理空間から抽象空間という方向に限られるという本稿の主張と一致する。

3.5. 第二言語習得中の学習者に見られる拡張

第二言語習得中の学習者に見られる拡張は、3.1. で挙げた(2)の解釈の現場での拡張と(3)の習得時の拡張に関係する。

BNC から抽出した成人母語話者のデータと学習者コーパス²⁴から抽出した日本人学習者の *in* の補部名詞句の上位項目の偏り度(+1 に近いほど学習者が過剰使用、-1 に近いほど過小使用を示す)を示したのが図 3 である。

²⁴ (1)「日本人英語学習者コーパス」プロジェクト(<http://www.eng.ritsumei.ac.jp/lcorpus/index-j.html>)の成果である、日本人の大学生が書いた作文コーパス(約 32,500 語)と、(2)筆者独自のコーパスから成る約 43,500 語のコーパス。筆者独自のコーパスは、インターネットの検索エンジン Google(<http://www.google.co.jp/>)を利用して、(2a)「Japanese Sorry “poor English”」を検索キーにしてウェブ全体から検索して日本人が英語で書いたと思われるテキストを集めたものと、(2b)「“English diary”」を検索キーにして日本語のページを検索して日本人が英語で書いた日記と思われるテキストを集めたものから成り、規模は約 11,200 語。

図 3: 成人母語話者・日本人学習者の *in* の補部名詞句上位項目とその偏り度



このデータが直接的に示すのは、学習者と母語話者の *in* の補部名詞句の使い方には大きな差があるということだが、それは、学習者が *in* の意味を母語話者と同様にはとらえていないということでもある²⁵。

また、筆者は 7 人の専門学校の学生²⁶に対して、Rice (1996: 151) にならった小規模な実験的なテストを実施した。その結果が表 5 である²⁷。

表 5: 学習者の不変化詞を使った自由作文における不変化詞の意味の分布

	Spatial	Temporal	Abstract	Phrasal Verb	TOTAL
<i>at</i>	5	9	2	3	19
<i>on</i>	13	4	3	1	21
<i>in</i>	22	4	5	—	31

非常に小規模な実験であるが、ここで *abstract* に分類されている例の多くは成句的なものであり(詳細は石井(2005)を参照)、やはり語彙化されたメタファーの使用は難しいということが示されていると言えよう。

拡張方向の一方方向性に関しては、第一言語習得の場合と同様のメカニズムが第二言語習得においても見られると考えられるが、全体的な傾向としては、概して狭義の字義表現か

²⁵ *in* の補部位置に環境を限定しなくてももともと過少使用しているもの(*area, case, form, sense*)や、もともと過剰使用しているもの(*place*)については別途検討が必要だが、それは本稿の目的を超えているためここでは扱わない。

²⁶ 日本人学生 3 名(自己申告による英語学習歴は 5 年・7 年・11 年)と中国人学生 4 名(同じく 3 年・6 年・10 年・10 年)。

²⁷ Rice の実験同様、1 人につき 10 文の作文を指示したが、被験者の熟達度が低く、全員 10 文を考えて書くことはできなかった。

ら語彙化されたメタファーへという第一言語習得の場合とは異なり、第二言語習得の場合の習得順序は、教科書に出てくる順などのさらに突発性の高い順番となり、意味の連続性がとらえられていないことが多いと考えられる。例えば、筆者が初めて英語を学ぶ留学生のクラスで使用した日本人の中学1年生用の教科書²⁸では、*in* は *live in Australia / in the afternoon / in summer / play in the snow* という順で、*at* は *at home / get up at seven / look at / swim at the beach / at night* という順で、そして *on* は *on Mondays / (your cap) is on your head* という順で出てくる。学生たちはこれらの不変化詞に関して1つの語としての連続したイメージが形成できないようであるが、特にこの中でも *on* だけは時間の用法が最初に出てくるからか、*on* に関しては、2つ目の *on your head* が出てきた時に、「*on* は『何曜日に』という意味じゃないのか」との声があった。また、「*at* は色々な意味がありすぎる」という声もあり、学習者が不変化詞の意味をなかなか理解できていないということが、これらの例からも分かる。また、筆者の経験から別の例を挙げると、日本人の高校3年生の大学受験生でも6人中4人が、*about* に関して、「～について」という意味しか知らずに場所の解釈はできなかった。学習が中核語義から始まり、意味の連続性が確保されるほど大量のインプットがないために、学習者は語彙化されたメタファーとその背後にある概念メタファーを、母語話者のように広い意味での言語知識の一部として獲得することができず、それが学習者と母語話者の大きな隔たりの原因の一つになっていると言えよう²⁹。

さらに Jespersen (1922: 138)は、前置詞の意味は大きく広がっているので、論理的にはある状況を描写するのに複数の前置詞の使用が可能である場合も多いが、慣習により制約を受けていると指摘している。例えば、場所の前後関係を示すのに、後ろについては“*at the back of*”とも、(アメリカ語法とされるが)“*in back of*”とも言うが、前については“*in front of*”と言うのみで、“*in front of*”の意味で“*at (the) front of*”とは通常言わない。この例が示すのは、これらの表現が意味による制約というよりはむしろ、慣習的な制約により前置詞の選択が固定されているということである。このような事情が上述の指示物と結び付けられていないということと合わさって、学習者は空間不変化詞の理解に困難を覚えるのだと考えられる。

また、句動詞・イディオムについては、学習者はその共起語の交換可能性の低さ、つまりある意味での語彙的性質の強さから、個々の部分の意味は全く見ずに項目ごとに覚えていこうとする傾向がある。例えば“*look for*”は「探す」，“*look after*”は「似ている」というように主に訳語の対応で覚えていく。したがって、例えば、これは筆者が高校生に英語を

²⁸ 東京書籍の New Horizon English Course 1。

²⁹ このような傾向は、不変化詞に限らず、外国語が関係する場合には、より一般的に見られる現象と言えるかもしれない。例えば語源は同じでも日本語への導入の時期や分野が異なる外来語を見てみると、「ストライク」・「ストライキ」などの語形が違うものだけでなく、「リング」(指輪・四角いボクシングのリング)などの日本語における語形が同じものであっても、同音異義語のように理解されている。すなわち、外来語として入ったものは、それが語の意味のプロトタイプであろうとなかろうと、概念・事物と語が固定的に結び付いてしまうのである。これは日本語に限った話ではなく、例えば英語でも‘*shirt*’と‘*skirt*’などの二重語(doublet)に同様の関係が見られる。このように外国語の概念を取り入れる際の困難と、学習者が不変化詞のイメージ・スキーマを形成する際の困難には、概念中心で語を学習・導入しようとすることに起因する共通性が一定程度認められる。

教えていた時の経験であるが、“Let’s look over this brochure.”という文は *over* という不変化詞の字義通りのイメージを知っていれば理解はそれほど困難でないはずなのだが、“look over”という項目としての意味(訳語)を知らない学習者は理解できない。もちろん学習者がイメージ・スキーマを習得する際も、母語話者の幼児と同様に経験から抽出しなくてはならないというわけではないであろうし、*over* のイメージ・スキーマ形成の元になるような経験は学習者でも当然したことがあるはずである。問題なのは、母語話者とは違い、学習者の場合にはその経験と *over* が結びついていないということである。

第一言語習得の場合と同様に、学習者は(ある程度学習段階が進んだ学習者であっても)語彙化されたメタファーを理解することはできても、発信はできないことも多い。イメージ・スキーマを理解したとしても、語彙化されたメタファーにおいて重要な役割を果たす概念メタファーについてはほとんど注意が向けられることがなく、明示的・暗黙的を問わず、概念メタファーを知識として持っていないことが多いためと考えられる。そのため、類推やたまたま母語にも近い概念メタファーが存在する場合には、語彙化されたメタファーが理解できることもあるが、自分から語彙化されたメタファーの表現を使えるようになるためには、母語話者の言語共同体が共有する慣習化された概念メタファーの習得が必須であると考えられる。

3.6. 解釈のデフォルト域に関して

発話を解釈する際に特別な過程を経ずに理解される部分を解釈の「デフォルト域」と呼び、本小節ではその観点で、これまでに論じた区分とそれらの間の拡張の一方向性について検討する。

成人母語話者にとっては、広義の字義表現の部分(狭義の字義表現と語彙化されたメタファー)が解釈の際のデフォルト域であり、言語の実使用のデータでは、高頻度の用法がこの中に見られると考えられる。実際に、BNC から抽出した 50 例(2.5.を参照)は(ごく少数のその他の分類を除いて)全てこの広義の字義表現であった。

第一言語習得期の幼児は、基本的に最初に狭義の字義表現から習得する傾向があるが、語彙化されたメタファーの理解・生成に困難が見られることから、解釈のデフォルト域が成人母語話者と比べると狭いと考えられる。しかし、習得が進むにつれて徐々に語彙化されたメタファーを習得し、解釈の幅が広がり、メタファーだと感じずに語彙的な意味と感じられる部分が広がっていくと考えられる。その幅の広がりの最終的な位置が語彙化されたメタファーの限界点、すなわち広義の字義表現の意味の限界点であり、そこから先は狭義のメタファーのレベルでの拡張となる。

学習者の第二言語習得の場合は、必ずしも狭義の字義表現から習得するわけではなく、しかもインプットが少ないために経験から帰納的にイメージ・スキーマを構築することはほぼ不可能であり、また中核語義から語彙化されたメタファーに渡って存在する連続性も必ずしも確保されないため、一対一の訳語で暗記したり、断片的な理解にとどまったりする。

4. まとめと今後の課題

英語の不変化詞の意味には、物理空間に関する狭義の字義表現と、そこから抽出されて形成されるプロトタイプの概念であるイメージ・スキーマが中核として存在するということを、このような議論が起こらない背景にヨーロッパ哲学の前提となる発想があるということを確認した後に、さまざまなデータに基づいて積極的に示した。そして、言語的な意味に見られる拡張・解釈の現場での拡張・習得時の拡張の全てにおいて、狭義の字義表現を起点として、そこから語彙化されたメタファーへ、そしてさらに狭義のメタファーへと一方向的な拡張関係が見られるということを論じた。さらに、これらの見解が言語習得のデータとも一致するということを確認した。区分、習得の順序性、そして拡張の方向性があるということは、不変化詞の意味には階層関係があるということである。

本稿での議論は共時的な面での議論であり、通常は通時的な変化は習得順序や共時的な意味の構造とは無関係と言えるのだが、不変化詞に関しては一定程度の同質性が認められるかもしれない。例えば Rice (1996: 162)は心理実験の結果明らかになった不変化詞の意味のプロトタイプからの意味拡張と、通時的な新語義の発達過程との間に共通性があるのか、今後検討が必要だとしている。また、Tyler and Evans (2003: 47-48)は、不変化詞の通時的な意味の発展の歴史と共時的な意味の拡張にある程度の類似性が見られるのは偶然ではないと指摘し、通時的な発展も重視している。さらに、不変化詞によって、高頻度の部分は一様ではなく、例えば *on* や *about* などでは高頻度の用法は抽象度が比較的高い部分に見られ、*of* や(不定詞標識の‘to’も不変化詞とするならばこの)*to* などの比較的文法化が進んだ不変化詞もあることから、そういった不変化詞の意味においては物理空間に関するプロトタイプの存在が弱まっている可能性もあり、完全な通時的検証ということは現実には不可能であるが、通時的な考察も行う必要がある。

さらに、成人母語話者も解釈の現場で狭義の字義表現のレベルを出発点とする拡張を見せるということを示すために、今後より明確な論拠を得る必要がある。

引用・参考文献

- Bellinger, D. and J. Gleason. 1982. “Sex Differences in Parental Directives to Young Children.” In *Journal of Sex Roles*, 8, pp. 1123–1139.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Pearson Education.
- Blasko, D. G. and C. M. Connine. 1993. “Effects of Familiarity and Aptness on Metaphor Processing”. In *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, Vol. 19, No. 2, pp. 295-308.
- Bliss, L. 1988. “The Development of Modals.” In *The Journal of Applied Developmental Psychology*, 9, pp. 253–261.
- Brown, R. 1973. *A First Language: The Early Stages*. Harvard University Press.

- Choi, S. and M. Bowerman. 1991. "Learning to Express Motion Events in English and Korean: The Influence of Language Specific Lexicalization Patterns." In Levin, B. and S. Pinker, eds., *Lexical and Conceptual Semantics*, Blackwell, pp. 83-121.
- Ellis, R. 1999. "Item versus System Learning: Explaining Free Variation." In *Applied Linguistics*, 20, pp. 460-480.
- Fillmore, C. J. 1982. "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis." In Jarvella, R. J. and W. Klein, eds., *Speech, Place, and Action*, John Wiley & Sons Ltd, pp. 31-59.
- Friederici, A. D. 1983. "Children's Sensitivity to Function Words during Sentence Comprehension." In *Linguistics*, 21, pp. 717-739.
- Gathercole, V. 1986. "The Acquisition of the Present Perfect: Explaining Differences in the Speech of Scottish and American Children." In *Journal of Child Language*, 13, pp. 537-560.
- Geeraerts, D. 1988. "Where Does Prototypicality Come From?" In Rudzka-Ostyn, B. ed., *Topics in cognitive linguistics*, John Benjamins, pp. 207-229.
- Geeraerts, D. 2001. "The Definitional Practice of Dictionaries and the Cognitive Semantic Conception of Polysemy." In *Lexicographica*, 17, pp. 6-21.
- Gibbs, R. W. 1994. *The Poetics of Mind: Figurative Thought, Language, and Understanding*. Cambridge University Press.
- Goatly, A. 1997. *The Language of Metaphors*. Routledge.
- Henry, A. 1995. *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*. Oxford University Press.
- Herskovits, A. 1988. "Spatial Expressions and the Plasticity of Meaning." In Rudzka-Ostyn, B. ed., *Topics in Cognitive Linguistics*, John Benjamins, pp. 271-297.
- Jackendoff, R. 1983. *Semantics and Cognition*. The MIT Press.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. The MIT Press.
- Jespersen, O. 1922. *Language: Its Nature, Development, and Origin*. George Allen & Unwin Ltd.
- Lakoff, G. 1987. *Woman, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. 1988. "A Usage-Based Model." In Rudzka-Ostyn, B. ed., *Topics in Cognitive Linguistics*, John Benjamins, pp. 127-161.
- Langacker, R. W. 2002. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Second Edition. Mouton de Gruyter.
- Leech, G. 1974. *Semantics*. Penguin.
- Lyons, J. 1977. *Semantics*, Volume 1. Cambridge University Press.
- Mandler, J. 1991. "Prelinguistic Primitives." In Sutton, L. A. and C. Johnson, eds., *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, Berkeley Linguistics Society, pp. 414-425.

- Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. The MIT Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Rice, S. 1996. "Prepositional Prototypes." In Püts, M. and R. Dirven. eds., *The Construal of Space in Language and Thought*, Mouton de Gruyter, pp. 135-165.
- Rosch, E. 1973. "On the Internal Structure of Perceptual and Semantic Categories." In Moore, T. E., ed., *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, Academic Press, pp. 111-144.
- Sapir, E. 1921. *Language : An Introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace and Company.
- Suppes, P. 1974. "The Semantics of Children's Language." In *American Psychologist*, 29, pp. 103-114.
- Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Volume 1: Concept Structuring System*. The MIT Press.
- Taylor, J. R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Clarendon Press.
- Tyler, A. and V. Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge University Press.
- Whorf, B. L. 1939. "The Relation of Habitual Thought and Behavior to Language" In Carroll, J. B., ed. *Language, Thought, and Reality*, The MIT Press, pp. 134-159.
- Wilson, J. and A. Henry. 1998. "Parameter Setting within a Socially Realistic Linguistics." In *Language in Society*, 27, pp. 1-21.
- 池上嘉彦. 1975. 『意味論』 大修館書店.
- 石井康毅. 2004. 「不変化詞(前置詞・副詞)によるメタファー表現の考察 -子供のコーパスに基づく認知言語学的視点からの考察-」. 『言語情報学研究報告 3 コーパス言語学における構文分析』 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp. 157-177.
- 石井康毅. 2005. 「英語の不変化詞の意味と語彙的意味として内在化されたメタファー」. 『言語情報学研究報告 7 コーパス言語学における語彙と文法』 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, pp. 497-520.
- 國廣哲彌. 1982. 『意味論の方法』 大修館書店.
- 初山洋介. 1995. 「多義語のプロトタイプの意味の認定の方法と実際」. 『言語学論集 14 号』 東京大学文学部言語学研究室, pp. 621-639.
- 山田進. 1981. 「機能語の意味の比較」. 國廣哲彌(編) 『日英語比較講座 第3巻 意味と語彙』 大修館書店, pp. 53-99.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 くろしお出版.

On Three Metaphoric Levels of English Particles

Yasutake ISHII

(PhD Candidate, Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

Abstract

It has been taken for granted as a fact that English particles (prepositions and adverbial particles of the same forms), such as *in* and *down*, have spatial meanings as their semantic cores. This article critically discusses the background behind this fact. Based on this review, it will be argued that the meanings concerning concrete objective space are the core senses of English particles. The author's argument is that particles have a hierarchical structure consisting of three semantic levels: (1) a literal meaning in the narrow sense: the core sense consisting only of an image schema with topological characters (e.g. *The card is in the envelope.*), (2) "lexicalized metaphors": lexical meanings obtained through metaphoric extensions from the core sense (e.g. *She is in white today.*), often with conceptual metaphors incorporated (e.g. *That argument has holes in it.*), and (3) metaphors in the narrow sense: so-called metaphors and idioms located at the extreme end of the metaphorical spectrum (e.g. *God is in the details.*). Spatial image schemata, which are formed from references to concrete objects in our experience, function as a prototypical core sense of particles. The literal meaning in the narrow sense and lexicalized metaphors of a lexical item constitute literal meanings in the broad sense, which form the default range for interpreting a lexical item.

It will be assumed that there are three types of metaphoric extensions for the meanings of particles: (a) a theoretical extensional relationship found among meanings of a lexical item; significant for discussing lexical meanings of an item as in the case of this argument, (b) an extension made for interpreting metaphors (in the narrow sense) in a discourse, and (c) an extension made by children and learners for acquiring unfamiliar metaphoric meanings of a lexical item. The author tries to confirm that all three types of metaphoric extensions have irreversible unidirectionality from the core sense, through lexicalized metaphors, and to metaphors in the narrow sense.

The discussion in this article takes a mix of a traditional "introspective" approach and a newer "corpus-based" one. It will be based on various data from psycholinguistic experiments in the literature and on actual data which have been retrieved from (i) written and spoken corpora of adult native speakers of English, (ii) spoken corpora of children acquiring English as their first language, and (iii) written corpora of Japanese EFL learners.

The assumption of a layer structure for the meanings of particles will give one possible answer to the questions of why young children have difficulty in understanding some metaphoric uses of particles and why EFL learners show lingering difficulty in mastering particles even after learning English for quite a long period of time.